

か遊ぶんじゃないよ。いいない」

ふりかえりの中で

Y子「なんだか、いやだな。はっきり言えないけど、いやな気持ちです。そうです」

担任「いやな気持ちね。そう、いやな気持ちって、どういうこと」

Y子「うん、N子っておこりっぽいのかなあ、ひがんでるのかなあ、やっぱりいばっているんだね。ひねくれてるってもういのか、いやだね、先生」

担任「先生も、ちょっといやだったなあ、人をどなりつけたり、いや味を言ったりするのっていやな気持ちだったね」

Y子「T子ちゃんは遊びたかったんだよね。遊びたいから来たんだよね。N子はなんで仲間に入れようとしなかったんだらう。なんでなのかなあ？」

8. 考察

担任からの情報により母親が本人を認め、受容し、喜んでいることとして本人にプラスのストロークを与えることで母子関係が改善されていった。

母親の話では、小さい時からあった「つめかみ」が、本人が甘えたいそぶりがあった時には抱きしめてやったり、からだをさわってやったり、などでやったりしたせいか、1学期の後半ごろからなくなってきたという。さらに、以前は、「大きいくせに」と妹の前などで言っていたが、いけないことと思って言わないようにしているし、できるだけ本人の心の負担になるような言葉は避けるようにしているとも表明した。

父がほめてやったりすると、本人は自分からいろいろとやろうとすることが多くなっているし、妹の面どうをみるが多くなっていることが、数少ない父の言葉からも聞かれた。

ロール・プレイングを通した指導では、友人関係がよく改善されている。なかなかとりかかりにくい指導であったが、道徳の授業や放課後に子どもたち数人を入れたグループで何回か試みていく

ことにより、本人もロール・プレイングのしかたを理解していった。

母親の成長した姿としては、母親が「若くして子どもを生んだので、わからないことばかりだったが、今にして母親としてのあり方を痛感している」と述べている言葉に認めることができる。

また、本人は、「まわりに気を使うようになった」「気をつけなくてはという気持ちを持つようになった」と、自制する心の芽生えがみられるようになった。母子ともに成長の跡がみられる言葉である。

いじめについては、いじめ、いじめられの当事者だけの指導にあたっては根本的な解決にならないので、担任は学級全体に働きかけることに積極的に取り組んだ。

まず、仲間はずれ、いやがらせなどを見たり聞いたりした時は、機会をのがさず本人たちに個別に会って話し、説諭した。そのあと、だれが当事者であるかわからないように、例え話や他の組の話のようにして全体に対して指導をするようにした。その結果、指導していく過程で、女子集団の変容が見られるようになった。

「やんない方がいいよ」「やめな」という声がかくに男子に向けられるようになった。それが男子の変容につながり、学級全体への変容とつながった。いじめを不正として見る目と、行動へ移していく周囲の変容が、本人の変容にも結びつき、「まわりに気をつけなくては」という心の成長に結実していった。

9. 今後の課題

両親については、具体的なアプローチが情報を提供するという形でしかできなかった。家族問題へのかかわり方については、未婚である担任にとって難しい課題である。

友人関係は、ほとんど改善されているが、自主性とか積極性という点では、まだまだ指導援助していかねばならない問題が残されている。